

2022年7月24日

わたしもあなたを罪に定めない

ヨハネによる福音書 7：53～8：11

・心に残る言葉として

今日は、ヨハネによる福音書 7：53～8：11 を共に読んでいきたいと思います。この箇所は、ヨハネによる福音書の中でも、最も知られた箇所の一つかもしれません。ある本に、その教会の信徒の方が、この言葉があるからこそ自分はキリスト者として生きていくことが出来ると言っているように記しています。それは、その方だけの思いではないと思います。私たちも同じような思いを持つのではないかと思います。それほど、この箇所は、私たちの心に深く刻まれている言葉であると思います。私たちが神様に赦されて生きている恵みが、ある具体的な出来事を通して鮮やかに示されている。そういう箇所だと言ってよいと思います

まず、この箇所についている括弧について説明をしなければなりません。先週、松浦先生がイエス様のルカによる福音書での十字架の場面を説教されましたが、そこでも括弧が出てきて、先生が説明をなさっていました。今日の箇所にも括弧が出てきますので、その説明が必要かと思えます。少しややこしい説明をすることをお許してください。ご承知のように、聖書はこれが原本だという決定版があるわけではありません。多くの原本を書き写した本、写本があります。それを遡って、古い写本が恐らく原本に近いと判断しているのです。そうして、原本に近いのではないかとされている有力な写本には、実はこの箇所は記されていないのです。しかし、比較的早い段階の重要な写本には、この箇所が記されているものが多く存在しています。それで、新共同訳聖書では、括弧をつける形で記されていることになっています。

こういう経過を考えていて、私は思わされたことがありました。それは、そうして、原本に近いのではないかとされている有力な写本に残されていないこのイエス様と一人の女性のやり取りを、教会は大切に伝えてきたのかということなのです。やはりそれは、この箇所にこそ、自分たちの信仰の基礎があると明確に思ったからだだと思います。ここに示されている恵みによって、私たちは主イエスの赦しを受け、今キリスト者として歩んでいる、そう思えたからだだと思います。だからこそ、世々の教会は、この箇所を大切に受け継いできたのだと思います。

今日は、このヨハネによる福音書 7：53～8：11 の言葉をご一緒に読み進めていくことを通して、私たちに与えられている救いの恵みを、心に深く受けて止めていきたいと思えます。

・律法学者やファリサイ派の人たちの問い

イエス様は、この時、神殿の境内で、人々に向かって話をしておられます。恐らく、イエス様が話されていたのは、人間に対する神様の愛であると思います。そして、その愛を具体的に示されているご自身の姿であると思います。少し前の箇所、イエス様は「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」と言っておられましたが、魂の渴きを癒す真の水を与える、そのような思いを持って、この日もここに集まっている人々に向かって、語り掛けておられたに違いないのです。

しかし、その日は誰もが驚くようなことが起こったのです。そうして話をしているイエス様の前に、一人の女性が連れて来られたのです。この女性は、姦通の現場で捕らえられたのでした。捕らえられたまま、ここに連れて来られ、皆の真ん中に立たされていたのです。姦通の現場とありますので、直視に堪えないような姿であったかもしれません。そういう女性が連れて来られて、ここに立たされているのです。この女性を連れてきたのは、当時の宗教的な指導者である律法学者やファリサイ派の人たちでした。彼らは、この女性について、イエス様に尋ねるのです。「こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか。」、と。

この問いは、律法学者やファリサイ派の人たちが、この女性をどうしたらよいか本当に困ってしまってイエス様に教えて欲しいと思って、イエス様の所へ連れてきたということでは、勿論ありません。ある重要な目的があって、イエス様の所へ連れて来たのです。それは、訴える口実を得るためなのです。イエス様は神様の愛を説いている、それならば、「裁いてはならない」と言うに違いない。そうすればモーセの律法に違反することになる。もし、仮に「律法通り打ち殺せ」と命じるならば、イエス様を通して語られる神様の愛に心を動かされていた民衆が、イエス様の許を離れるきっかけとなるであろう。つまり、どちらに答えたとしても問題になるような、そういうことなのです。そして、この女性を連れて来て「どうするべきか」と問うたのです。つまり、律法学者やファリサイ派の人たちにとって、この女性がどうなるのかは問題ではありませんでした。イエス様を訴える口実を得られるかどうか問題でした。

彼らは、自分たちなりの答えを持っていました。それは、「彼女は石で打ち殺されるべき」という答えです。これには、ちゃんと根拠がありました。ここで「モーセの律法」とありますが、これは、旧約聖書に出てくるモーセが神様から示された掟である「律法」を指しています。神の民イスラエルは、長年エジプトで奴隷の生活を送っていました。そのようにして、大きな苦しみの中にいた人々を、神様はモーセをリーダーとしてお立てになり、エジプトから脱出させました。そして、神様はただ脱出させ

ただけではなく、人々がどのように歩んで行ったらよいか、その道を示すために「律法」をお与えになりました。こう生きていくことこそ、神様の恵みに応える道であることを、神様自らがお示しになったのです。そして、その後、この律法は、イスラエルの人々の行動の原理となりました。これに従って生きることが歩みの中心となったのです。そして、その中にこの女性のようなケースの場合、律法を記している申命記に「その二人を町の門に引き出し、石で打ち殺されねばならない。」とありますので、この女性は姦淫をしてしまった男性と共に、石で撃ち殺されなければならないのです。それが、律法に基づいての当然の結論ですし、彼らもそれが正しいと思っています。それでも彼らは、イエス様に答えを求めています。先に触れたように、イエス様を訴える口実を得ることが出来ると思っていたからなのです。

・イエス様の答え

「この女性をどうするのか」という人々からの問いかけに対して、イエス様は直ぐにはお答えにならなかったのです。むしろ、屈みこまれて、指で地面に何か書き始められたのです。屈みこんで、指で地面に何か書いておられる。この姿は、とても私たちの印象に残る姿だと思います。どうして屈みこんでおられるのか、一体何を書いておられるのか、様々に想像するのではないかと思います。ここで地面に何を書いておられるのか、時には書かれていたのはこれこれの箇所の聖書の言葉に違いない、そういう説明がされている時もあります。しかし、聖書において細かい記述がなされているわけではなく、単なる想像に過ぎないと思います。

けれども、ここで一つ確かなことがあると思います。それは、イエス様は律法学者やファリサイ派の人たちの問いへの回答を、まずは拒否したということです。拒否、つまり、当初は答えることをなさらなかったのです。そうして、地面に何かを書き続けられたのです。その姿を見て、律法学者やファリサイ派の人たちは、イエス様が答えに窮しておられると思ったのです。いよいよ追い詰めることが出来ると思ったのです。それで、律法学者やファリサイ派の人たちは、更に答えを求め続けたのです。それも、執拗に求めたのです。それで、イエス様は、身を起こして「あなたたちの中で罪を犯したことがない者が、まずこの女に石を投げなさい」と言われたのです。すると、思いもしないことが起こったのです。年長者から始まって、一人また一人と立ち去ってしまったということなのです。そして、結局全ての人が立ち去ってしまったのです。

ここでの「年長者から始まって」という言葉に触れて、思い出したことがありました。前任の教会の頃のことですが、分区教会婦人会連合の秋季修養会に出席された方がその報告の中で、分団でこのような言葉を聞いた、それが心に残っていると話し

くださいました。その分団におられた高齢の方が、こんな話をされたのです。年を重ねてくると自分の醜さや弱さを痛感する、ヨハネによる福音書 8 章でイエス様が罪のない者がまず石を投げよと言われた時に年長者から始まって立ち去ったとあるが、その言葉の通りであると思わされている。そういう言葉が、とても心に残ったという報告だったのです。

その高齢の方の思いは、私たちの実感ではないかと思うのです。私たちも、歩みを重ねていく時に、何か日々罪を重ねながら生きているのではないかと思うことが有ります。それは、恐らく、その方や今高齢の中を歩んでいる方だけの思いではなく、多くの人が感じている実感のようなものではないかと思えます。結果、この女性に石を投げる人は、一人としていなかったのです。誰もいなくなってしまったのです。

そうして、誰もいなくなってしまった、これは、イエス様が機転の利いた鮮やかな切り返して、この時の危機を脱せられたということなのではないでしょうか。律法学者やファリサイ派の人たちとの論争に見事に勝ったということなのではないでしょうか。そうではないことを思うのです。ここで、イエス様は、改めて私たち人間が直面している真の問題を明らかにされているのです。そして、そこから解決をお示しになっているのです。

・真の問題の解決

イエス様は「罪を犯したことがない者が、まず、この女に石を投げなさい。」と言われました。そう言われたのはどういう意味なのか、本当に私たちは分かっているのだろうかと思われました。イエス様は、人間誰も真っ白ではない、五十歩百歩、だから裁くことなどできない、そういうことを言われたのでしょうか。お互い脛に傷を持つ身であるから、傷をなめ合うようにして、許さなければならない。そういうことなのではないでしょうか。イエス様が「罪を犯したことがない者が、まず、この女に石を投げなさい。」と言われたのは、もっと深い意味を持っていると思われたのです。

私自身、改めて考えさせられたのは、この時の女性の「罪」とは何だろうかということ。姦淫を行ってしまった行為そのものなのではないでしょうか。そうではないと思わされたのです。そのような行為を生み出してしまっている根の部分にある問題こそが、ここで問われていることを思うのです。それは、神様を見失ってしまっていたことなのです。

以前読んだある小説で、非常に規範意識が高い女学生、ある男性を好きに不倫に走ってしまう、その彼女の心情を辿るというものがありました。規範意識が高い女学生が、どうしてそこに踏み出してしまったのか。結局、その男性のことを思うと全ての規範意識は吹き飛んでしまったとあるのです。確かに、そういう思いで、その歩みへと踏み出していくことになってしまったのです。私は思うのです。この女性も、イス

ラエルの民の一員です。当然、律法を知っているのです。しかし、小説の女学生のように、ある男性のことを思う時に、全てが吹っ飛んでしまったのです。吹き飛んだ全ての中に、神様の前に生きていたということも含まれていたのです。神様の前に生きていたということも、吹き飛んでしまったのです。そのことが、この時の姦通を生み出してしまっているのです。それ故に、これは道徳的な問題ではないのです。神様の前での問題なのです。真の意味での「罪」の問題です。神様を見失って歩んでしまったことこそが、問われているのです。

ですから、この時年長者から始まって全ての人が立ち去ったということも、単に自分も悪いことをした経験があるなあと言うことではないのです。同じように、神様を見失ってしまった経験があるということなのです。私も最近、大きな問題にぶつかり、どうしたらよいか問題に飲み込まれてしまっていたことがありました。神様は、どこかにいってしまった、そういう歩みなっていたことを思います。将に、この女性が歩んでしまった歩みを自分が歩んでいたことを思うのです。そういうことを思われるのです。恐らく、ここに集まった人たちも、私と同じように、神様を見失ってしまった経験があったのです。そのことを思い起こすのです。それで、ああ自分も同じだったということ、彼女と同じ歩みを歩んできていた。それが実感でした。故に、彼女に石を投げるのが出来なかったのです。そうして、立ち去ることになってしまったのです。

・真に裁く方の赦し

そして、イエス様は言われます。「わたしも罪に定めない。」と。この「わたしも罪に定めない。」というイエス様の言葉は、とても誤解されているのではないかと思います。イエス様、罪は考えなくてもよい、大目に見てあげる、ではないのです。罪は、ちゃんと裁かれるべきということなのです。「石を投げるな」ではなく、投げる資格がある者が投げよと言われるのです。つまり、この人を裁くことが出来る者が裁くべきだ血と言われたのです。そして、ここにたったお一方残ったのです。イエス様です。このイエス様こそが、彼女を裁くことが出来る唯一の方なのです。その方の前に彼女は立たされるのです。

そして、そのイエス様は言われるのです。「わたしも罪に定めない。」と。これは人間の慰めの言葉ではないのです。裁くことが出来る唯一の方からの宣言です。だからこそ、それは、真の意味での救いなのです。この言葉の持っている重さを、改めて考えさせられるのです。「石を投げよ」、投げなくてよいではないとすれば、その石は一体どうなったのでしょうか。本来、彼女が受けるべき石はうやむやになったのでしょうか。勿論、そうではないのです。彼女は、この「わたしも罪に定めない。」とイエス

様が言われた本当の意味を受け取る時が来るのです。それは、イエス様が十字架におかかりになった時です。ここで、本来彼女が受けるべき石は、イエス様が十字架において全て受けられたのです。彼女は受けるべき石を全て受ける。そのことを心に持った言葉だからこそが、彼女への救いの宣言になったのです。そうして、この宣言は真理として、彼女を新しく生かしていくことになったのです。

・新しい生への招き

そして、イエス様は、ただ赦しの宣言をされるだけではないのです。これから彼女が歩いていく歩みについても、はっきりと語られるのです。「もう罪を犯してはならない」と。罪を犯さないで生きる、その歩みへと彼女を招いておられるのです。

私はキリスト者となって間もない頃、この箇所を読んで、最後の言葉がとても心に残りました。「もう罪を犯してはならない」、自分にこういう歩みができるだろうかと思いました。もしこの言葉がなければ、イエス様に赦されました。感謝して歩みましょう。それで終わることができる。とても心安らかにこの礼拝の場を去ることができるとは思いません。しかし、イエス様は「罪を犯してはならない」、そう生きよと命じられるのです。そうすると、非常に難しい宿題をいきなり与えられたような感じがするのです。そう思うと、それは結局ここでイエス様が言われる「罪」が、本当には私たちに分かっていないからなのです。

ここでの「罪」は、繰り返しになりますが、彼女にとって、姦淫を犯したことそのものではないのです。そうではなくて、神様を見失っていた、その状態を指しているのです。つまり、イエス様は「これから、悪いことをしないように生きよ」と言われているのではないのです。「罪」とは、見失われた羊の譬えのように、本来生きるべき場所、羊飼いの許を離れた状態を指します。神様の許を離れることこそが「罪」です。ですから、罪を犯さないとは、「私の許、神の許を離れるな」というイエス様の声に応じて生きることなのです。そうして、イエス様、神様の許で歩むことなのです。そうして歩むために、何が必要なのでしょう。イエス様の許を離れないように、強い志を持つことでしょうか。神様は「あなたを背負っていこう」と思っておられるのです。どんな時にも共にいと約束してくださるのです。たとえ、私たちが離れてしまったと思ったとしても、その時においても、実は神様に背負われているのです。イエス様は事実共にいてくださるのです。そうすると、神様が共におられることを、私たちが受け取っていくことこそ、神様が歩ませようとされる道なのです。本来共にいて下さっている、背負ってくださっているのに、そのことを絶えず見失ってしまいそうになります。その恵みを改めて受け止めるために、私たちはイエス様の声に聴くのです。その時、改めて神様が共にいてくださる恵みに立ち戻ることができるのです。そうして、

神様の許を離れず歩むのです。

今回、本当に大きな発見がありました。それは、年長者から全ての者が立ち去った時、彼女は一人だけ残ったのです。イエス様が見ておられるわけでもありませんので、誰もいなくなった状態で、立ち去ることも可能だったと思います。しかし、彼女はなぜ残ったのだろうかと思わされたのです。それは、やはりこの方からの言葉を求めたのだと思います。他の人たちも、「罪」を抱えて生きている、その認識は持っていたのです。しかし、神様が歩ませたいのはその先なのです。認識で止まらないのです。罪を赦されて生きる世界です。更に、再び罪を犯さないで生きる世界、そこへの招きなのです。

私たちは、本当に裁かれるべき人間です。そして、私たちが裁くことが出来るイエス様に赦されているのです。そうして、神の子として生きる道は開かれたのです。ですから、イエス様は、私たちに向かって「再び罪を犯すな」、つまり「私の許を離れるな」、この道を二度と離れるなとそう呼び掛けてくださっているのです。私たちは、このイエス様の言葉を受け入れ、赦された感謝を持って、生涯イエス様と共に歩んでいきたいと思えます。そうしてあゆみ子とこそ、神様が何より喜んでくださる道だからです。